

聖書：ローマ 8：18～25

説教題：神の子どもたちの栄光

日時：2015年11月22日（朝拝）

パウロはこのローマ書 8 章で、御霊にあるクリスチャンの救いの確かさについて語っています。前回の 17 節には現在のクリスチャンには「苦難」があるということが言われました。イエス・キリストを信じて罪を赦され、神の子どもとされた者たちが、なぜ苦しみ続けなければならないのか。それに対してパウロは、「苦難とそれに続く栄光」という順序があると述べました。それは私たちの主も通られた道でした。ですからキリストに結ばれた者たちもその道を通るのは当然の帰結です。だから自分が今、様々な苦しみの中にあっても、それを恥じる必要は少しもない。それはやがての栄光の序曲です。神の子どもたちに定められた正規の祝福コースを進んでいるしるしでさえあるのです。

このようにやがての栄光を見据えつつも今、苦しみのただ中にあるクリスチャンたちの励ましとなる真理をパウロは 18 節から語って行きます。まず彼が語っていることは「今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りない」ということです。ここに「いろいろの苦しみ」とありますが、私たちは実に様々な苦しみに悩まされながら生きています。しかし私たちはそれだけを見ず、それを将来の栄光との比較において見るのです。その時にどんなことが起こるのでしょうか。出て来る結論はただ一つ。今の苦しみは取るに足りない！ということ。いやあ、そんな風に簡単に言われちゃ困る！とある人は言うかもしれません。あんたにとってそうかもしれないが、私にとって今の苦しみはそんなに軽いものではない、と。それはそうかもしれません。しかし将来の栄光の素晴らしさを正しく見つめれば見つめるほど、私たちから出てくる結論は一つです。それは今の時のいろいろの苦しみは取るに足りないということです。たとえば皆さんが今日から 1 ヶ月間、ある場所のどぶ掃除を毎日してくれと言われたらどうでしょうか。なぜそんなことを私がしなくてはならないのか。何と大変な労働を強いられてしまったか、と私たちはブツブツ文句を言いながら嘆くでしょう。しかしもしその仕事が終わった暁には 1000 万円あげると言われたらどうでしょうか。私たちから出てくる結論は、今の時のいろいろの苦しみは実に取るに足りない！ということでしょう。1000 万円よりもっと多く、たとえば 1 億円くれると言ったらどうでしょうか。益々今の苦しみは取るに足りない。1 ヶ月間のどぶ掃除なんて拍子抜けするほど軽い奉仕であり、もっと他に何かをやったっていいですよとさえ申し出るでしょう。そしてこの栄光は「私たちに啓示される」とあります。これは「私たちの内に現わされる」という意味です。私たちは単なる傍観者ではないのです。私たち自身がこの栄光にあずかるのです。その栄光を見つめる時、今の色々の苦しみは取るに足りない

いものと私は考えます、とパウロは言っているのです。

さて、このやがての栄光は世界の被造物とも関係することを 19 節からパウロは語ります。19 節の「被造物」は、ここでは人間以外の動物や造られた世界を指しています。この被造世界が「切実な思いで神の子どもたちの現われを待ち望んでいる」。この「神の子どもたちの現れ」とは、私たちが将来あずかる栄光の日のことを指しています。キリストを信じた人はすでに神の子どもとされていますが、その栄光ある立場、祝福に満ちた立場はまだ十分には現われていません。人の目に隠された状態です。しかしやがての日には、神の子どもたちの栄光がはっきり示されるのです。その日こそ「神の子どもたちの現われの日」です。その日を被造物は切実な思いで待ち望んでいる。首を長くして待っているとされています。

その被造物の現在の状態が 20 節に「虚無に服している」と言い表されています。これはむなしい状態、あるいは本来の輝きを失っている状態のことです。なぜそうなっているのでしょうか。それは人間の罪のためです。創世記 3 章 17～18 節を見ると、人間が罪を犯したために土地は呪われてしまったとあります。その結果、土地は本来、豊かに実りをもたらすところだったのに、人が苦しみ、額に汗して働かなければ糧が得られないところへ変わってしまった。反対にいばらやあざみが生じる場所となってしまった。この世界を治める被造物の冠である人間が罪を犯したことによって、世界全体も罪の呪いの下に置かれるようになったのです。確かに神が一般恩恵によって今日もこの世界を支えてくださるので、なお自然の内に、動物の内に、神の栄光のひらめき、また美しさが輝いています。しかし聖書によればそれは造られた当初の状態からすれば著しく輝きを失っている。それが虚無に服しているということです。

しかしその被造物には望みがあるとされています。それはこの虚無の状態が自分の意思ではなく服従させた方によるから、とあります。この服従させた方とは神のことです。神は人間の墮落によって被造物を虚無の状態に置かれましたが、その神は人間の救いを約束してくださいました。とするなら、その人間の救い（回復）とセットで、世界の被造物も虚無の状態、滅びの束縛の状態から解放されることができる。そして神の子どもたちの栄光の自由と呼ばれる祝福の状態に、自分たちもあずかることができる。そういう希望をもって切実にその日を待ち望んでいるとされているのです。

ここに神は私たちが今見ているこの世界を捨てられないのだということを私たちは知ります。神は最初にこの世界と人間とを造った時、「見よ、それは非常に良かった」と創世記 1 章 31 節で言われているのに、サタンの策略によって罪が入ったからと言って、この世界を結果的につぶしてしまうことにでもなれば、神の負けになってしまいます。サタンによって神の計画はとん挫させられたことになってしまいます。しかし神はそれを許されないので、神は私たちが本来の救いの状態へ回復させてくださるばかりか、この世界も本来の状態へと取り戻されるのです。確か

に聖書はある箇所、天は燃え崩れ、天の万象は焼け溶けるとか、今の天と地は火に焼かれるなどと表現していますが、それはこの世界が丸ごと投げ捨てられ、破滅させられるという意味ではなく、火で焼かれると表現されるほどの全き聖めのプロセスを経ると言うことを言っていると考えられます。ですからやがての日に私たちが見る素晴らしい世界は、ある意味で私たちが今、見ている世界と別ではないのです。でなければ、被造物に望みがあるとか、彼らが待ち望んでうめいているという言葉には意味がなくなります。被造物はやがて本来の輝きを取り戻す日が来ることを望み見て、「ともにうめきともに産みの苦しみをしている」のです。産みの苦しみの期間は確かに苦しいものの、それは望みのない苦しみではなく、間もなく素晴らしい状態が来ることを待ち望む苦しみです。ある人は世界全体は今、まさにこのうめきのシンフォニーを奏でていると言っています。私たちはそのような目で、この世界を見ているでしょうか。これが聖書が示す被造物世界の現在の状態なのです。それほどに被造物は最後の救いの日、神の子どもたちの栄光の現われの日を切実に待ち望んでいるのです。

そして私たちもそうだ！ということが23節以降で述べられています。23節に「御霊の初穂を頂いている私たち」とあります。「初穂」とは、その年に収穫される作物などの内、最初に取りれるもののことです。それは量からすればわずかですが、やがて本格的に収穫されるものと同じものです。農夫はこの初穂を手にして味わうことによって、間もなく来るであろう収穫の味を味わいます。それと同じように私たちはまだ救いの最終状態には達していませんが、やがての天国の祝福と同じ種類、同じ質の味を今、聖霊によって味わっています。そういう私たちなのでうめくのです。なぜでしょうか。それは天国の味をいくらかでも味わっているために、今の自分の不完全な状態、弱い状態に満足できないからです。逆にフラストレーションを感じるのです。私が中高生の頃、夕方に家に帰って来て台所を通ると、私の母が「ハイ！今できたもの！」と言って、その日のおかずのできたてのものをつまみ食いさせてくれることがありました。できたてのおからとか、揚げたてのカツのはじっことか。ご飯の前のつまみ食いは得した気分になるものです。アツアツ、ホクホクでさらに美味しい。これが前味です。その時、どう思うでしょうか。もっと食べたい！もう一口欲しい！と思うのです。しかし母から「あとご飯の時にしなさい！」と言われる。するとどうなるか。私たちは「うめく」のです。もっと食べたいのに、と苦しい思いになる。しかしこのうめきは残念さと共に大なる希望と結びついています。それは夕食の時には本格的に今のおかずをお腹一杯食べられるという希望です。それと同じように私たちは御霊の初穂を頂いている者として、心の中でうめきながら、やがての日を待ち望む。すなわち子にさせていただくこと、私たちのからだの贖われることです。私たちはすでに神の子どもですが、やがての日こそ、そのことが本当の意味で現わされる日です。そしてその日は私たちが復活して栄光のからだを頂く日です。ペリピ書3章21節：「キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御

力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるので  
す。」

24 節に「私たちは、この望みによって救われているのです。」とあります。これは私たちはこの望みを持って救われているという意味です。私たちはすでに救われているのですが、この救いにはこれから明らかにされる祝福が付いているのです。24 節後半に「目に見える望みは、望みではありません。だれでも自分で見ていることを、どうしてさらに望むでしょう。」とありますように、まだ見ていないものが私たちの先に待っています。この素晴らしい将来を楽しみに待つという希望が、私たちが頂いている救いにはセットになっているのです。それで 27 節にこうあります。「もしまだ見ていないものを望んでいるなら、私たちは、忍耐をもって熱心に待ちます。」「忍耐」と「熱心」はしばしば両立が難しいものです。忍耐深い人は継続性・持続性はあるものの、どちらかというと静かで、どこか冷めている場合が多い。一方、熱心な人は熱くて一生懸命だが、長続きせず、いつのまにか前と変わってしまっているということが起こりやすい。しかし私たちは「忍耐をもって熱心に待つ」のです。どちらかだけではありません。先にある素晴らしい物を見つめて「忍耐」しつつ、同時に「熱心」に待つ。そうする時、私たちは今のいろいろな苦しみは取るに足りないを見て、その先にある栄光への道へと前進して行くでしょう。

私たちはその日を見つめて歩んでいるでしょうか。最後に私たちに与えられている約束を 2 つ見て終わりたいと思います。1 ヨハネ 3 章 2~3 節：「愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることが分かっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。キリストに対するこの望みをいだく者はみな、キリストが清くあらられるように、自分を清くします。」ここにも私たちはすでに今、神の子どもですとあります。しかしこの栄光ある立場がはっきり現われるのはかの日です。その日に私たちは栄光のキリストに似た者となります。その望みをしっかり抱く時に私たちは清い歩みに向かって励まされ、前進するのです。マタイ 13 章 41~43 節：「人の子はその御使いたちを遣わします。彼らは、つまずきを与える者や不法を行なう者たちをみな、御国から取り集めて、火の燃える炉に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯ざしりするのです。そのとき、正しい者たちは、彼らの父の御国で太陽のように輝きます。耳のある者は聞きなさい。」ここにやがての私たちが「父の御国で太陽のように輝く」とあります。この私たちが太陽のように輝く者へと変えられるのです！この将来の約束を見つめているなら、今の私たちの苦しみは軽いものになる！私たちもパウロと共に「今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。」と告白したいと思います。そして先にある物を見つめて、被造物が奏でているうめきのシンフォニーを聴きながら、神が実現してくださる神の子どもたちの栄光の現

れの日を心から待ち望む歩みをささげたいと思います。「目に見える望みは、望みではありません。だれでも目で見ていることを、どうしてさらに望むでしょう。もしまだ見ていないものを望んでいるなら、私たちは、忍耐を持って熱心に待ちます。」